

活動報告：ぶんぶんひろば

1、「ぶんぶんひろば」誕生の経緯

近年、我が国の社会全体が担うべき問題の1つに、次世代育成や子ども・子育て支援がある。本学でも社会的責務、地域貢献、学生の体験学習の場の提供などのさまざまな視点から、子ども・子育て支援センターの設置計画が構想されていた。そこへ、2010年の広島文化学園大学学芸学部設置の計画に合わせて新校舎建設となり、旧事務室(約150㎡)が子ども・子育て支援研究センターとして改修されることになった。

子ども・子育て支援研究センターとして、北側にテラス、南側にウッドデッキ(屋根部分は藤棚)を配し、室内には湯沸し室、子ども用トイレとおしめ交換のスペース、資料準備室、相談室を設置した。室内には行動観察のために、回転式のドーム型カメラを2台配置。資料準備室からはガラス越しに室内を見渡すことができ、ブラインドをおろせば、センターで遊ぶ子どもたちから見られることもなく、カメラの映像でモニターすることができるようになっている(図1参照)。

子ども・子育て支援研究センターでは現在、3つの活動(「ぶんぶんひろば」「ぶんぶんクラブ」「ミュージックチャイルド」)が行われているが、クラブは小学生対象の活動で、活動の場が小学校併設の児童館中心であり、ミュージックチャイル

ドは音楽療法室で行われるため、子ども・子育て支援研究センターの仕様は、主として未就園児をもつ家族が過ごしやすい構造、設備となっている。

近隣の子育て広場のノウハウを学び、道具やおもちゃを準備して2010年5月18日にプレオープンした。

その後、来場者へのアンケートなどから、開設時間やスタッフの体制、傷害保険などを再検討して、10月1日の正式オープンを迎えた。

2、活動のねらい

(1) 地域貢献

次世代育成を含む子ども・子育て支援は、今や国民的課題とも言える。少子化の中で育った若者が親となり、体験の少なさからくる精神的な不安や社会から取り残されたような孤立感などの問題が生じてきた。そこで、日常的に子育て仲間の集まる場所に集い、苦労や喜びを語り合い、共感しあう場が重要になってきた。「ひろば」は限られた時間ではあるが、子育て仲間に出会うことができ、子育てについて語り合い、子どもたちがのびのび遊ぶ様子を楽しむことができる。広場のねらいの1つはそのような場を提供することである。

また、地域にもさまざまな特技や秀でた知識を持った人的資源がある。世代や職種を超えて、多様な文化の交流を生み、人々が出会う場を作ること、ねらいの1つである。

(2) 学生の体験学習

少子社会で育った学生はきょうだい数も少なく、近所の異年齢での遊びの体験も少ないといわれる。保育を志しているとはいえ、赤ちゃんや幼児と接した経験は少ない。赤ちゃんや保護者との交流を授業に取り入れることは言うまでもなく、学内で、日常的に乳幼児や子育て中の保護者の姿を目にし、言葉を交わす機会があることは貴重な体験となる。

(3) 子育て支援のありかたの研究

1990年代半ばから、我が国ではさまざまな子育て支援政策がたてられ、実施されてきた。しかし、その施策のすべてが成果をあげているとはいえない。地域にはすぐれた知識や卓越した技術を持つ人が存在する。世代やさまざまな領域の人々

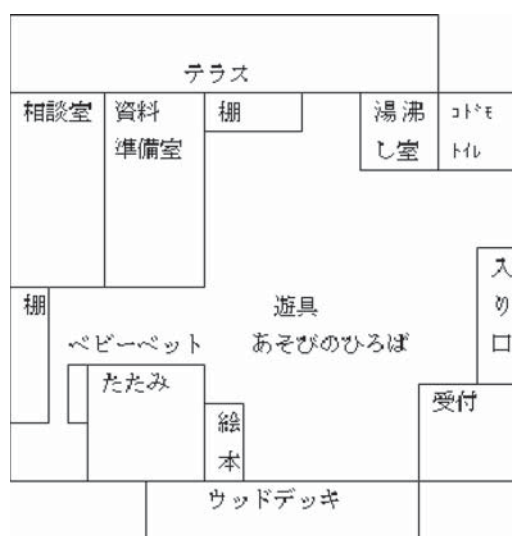


図1 子ども・子育て支援研究センター見取り図



写真1 子ども・子育て支援研究センター内部

に交流の場を提供し、地域に温かい人間関係が生まれる橋渡しをしたいと考えている。さらに、子育てをする人を主役にし、そのニーズに応える子育て支援策を子育て世代とともに考え、新しい子育て支援策を考案することや地域で子育て支援を担える人材を育成することもひろばのねらいといえる。

3、活動の内容

(1) 開設日時・開設時間について

①プレオープン期間

2010年5月18日にプレオープンし、6月末までは週1回（火曜日）のみ、7月から前期の終了（8月11日）までは、週2回（火、金曜日）、時間は午前中のみでの開設であった。

②正式オープン以降

2010年10月1日に正式オープンし、それ以降は週2回（火、金曜日）開設。時間は午前10時30分から15時までである。

(2) 利用状況について

①プレオープン期間は22回の実施であり、登録家族数68、延べ198の家族、延べ439名の利用があった。

②正式オープン以降は32回の実施であり、登録家族数は154、延べ483の家族、延べ利用者数は子どもの数659名、大人の数488名、合計1055名であった。

(3) 年齢別利用者数

未就園児を想定して準備した施設であったが、概ね予測に近い利用状況であった。実際

の利用者数を月別、年齢別に示す（表1）。

表1 年齢別にあらわした各月の利用幼児数

実施月 (回数)	10月 (9回)	11月 (8回)	12月 (5回)	1月 (6回)	2月 (4回)	合計 32回
0歳	46	28	14	9	19	116
1歳	83	61	39	43	46	272
2歳	84	43	20	30	20	197
3歳	23	12	9	7	5	56
4歳以上	5	2	1	8	2	18
合計	241	146	83	97	92	659

(2010年10月から2011年2月まで：単位は人数)

(4) 利用の様子

開始時間になると、三々五々来場し、名簿などの記入を済ませ、家族や友人たちとゆったりと遊びの時間を過ごしている。施設は日当たりがよく、明るく、なごやかな温かい雰囲気である。常連は次第に顔見知りとなり、子どもたちも親しくなっている。センターには3歳くらいまでを想定した、自然素材（木や布）中心のおもちゃが用意されている。学生が卒業研究で製作した大型遊具もあるので、各自が好みのおもちゃを選んで遊ぶ様子がみられる。ダンス衣装の変身コーナーも人気の遊びである。ウッドデッキは上部が藤棚で、自然の風や日光がある。ここもよく利用されている。

当初、ノンプログラムの予定であったが、アンケートの結果、「わらべうた」と「絵本の読みかせ・紙芝居」を実施することにした。また、適宜、季節に合う折り紙を提案し、資料と折り方を示したパネルなどを用意している。センターにあるおもちゃの作り方を尋ねられることもあり、資料を用意している。

(5) 事故と保険の利用について

「ぶんぶんひろば」では1回の利用につき、1家族50円の傷害保険を設定している。この間、1歳の男児2人がけが（遊具にぶつかる、飛び降りて足を挫く）で受診したが、いずれも軽傷で、傷害保険の利用はこの2件であった。

(6) スタッフについて

開設にあたり、3人の保育士を採用した（臨時採用）。ひろば開設時には常時2人が勤務している。開設1時間前から準備をし、終了後1時間の片付け・消毒を行っている。開設時には、会場の様子に配慮し、所定の時間に「わらべうた（遊び歌）」「読みきかせ・紙芝居」を提供する。来場者はスタッフを信頼し、相談なども気軽に持ちかけている。相談内容は比較的軽いものが多く、傾聴することで済む場合が多かった。

スタッフ研修は2回実施した。1回目は「育児相談について」（講師：本学教員）であり、2回目は「わらべうた（遊び歌）の実習」（講師：本学教員）であった。

4、当センターの授業への利用について

(1) 「子育て支援の場」の体験

子育て支援のあり方にはさまざまなスタイルがあるが、このセンターはオープンスペースという性質を持ち、主として就園前の子どもとその保護者が自由に過ごすことができるように設定されている。乳児保育や保育原理などの授業時間を用いて、この場所で学生はクッションフロアや子ども用のトイレスペース、水道の蛇口の高さやおもちゃや大型遊具、絵本など、この年齢の子どもたちへの設備面の配慮を学習し、スタッフの話聞き、運営面についての配慮を学んだ。

(2) 子どもや子育て中の家族からの学び

週2回、4時間半という短い時間ではあるが、学内に赤ちゃんや幼児、保護者の姿がある。日常的に挨拶を交わし、子どもたちに声を掛ける行動が自然にみられ、図書館や食堂では積極的に手助けする行動が保護者から評価されていた。

(3) 保護者との交流による学び

家族援助論の授業において、学生6～7人を1グループとし、このセンターにおいて子育てについてインタビューをする機会を設定した。時期は2年生の保育所実習の直前であった。保育所実習において実習生が直接保護者に接する機会は少ないと思われる。多少なりとも保護者支援の視点を持つための学習の機会とした。その際、各学生に「個人情報保護に関する誓約書」に記入してもら

い、個人情報保護への意識付けも行った。この活動は、保護者の方からも、「自分達の子育ての話が学生さんの役に立って嬉しい」と好評であり、子育て支援のヒントが得られた。

(4) 授業における継続的観察による学び

発達心理学の授業において、各学生が3回ずつの子ども観察を行った。保育系以外の学生でクラス的人数が少なく、常設の実施時間内にセンターでの観察が可能であった。運動面の発達、遊びの様子、社会性の発達について、できるだけ同一の幼児で、無理な場合には年齢に配慮して、継続的に観察を行った。授業で学習した事柄を実際に確認することができ、成果があがった。

(5) 授業の成果物の提示（遊具の提供）

保育学科の卒業研究において、学生10人が幼児用の大型遊具の研究・製作を行った。高さ1mの六角形で布製の「おもちゃハウス」は取り外す・貼り付ける・引っ張る・動かすなど、手指の機能を使うさまざまな工夫が凝らされている。ドアをくぐって入る囲まれた空間という要素も奏功し、人気の遊具である。実際に子どもたちが楽しんでくれることは学生たちの動機づけを高めた。製作途中に、実際に子どもたちに遊んでもらい、手直しすることにより、さらにすぐれた作品となった（写真2）。



写真2 おもちゃハウス

5、利用者のアンケート結果と今後の課題

(1) 「利用して良かったと感じている点」について

「ひろばを利用して良かったと感じている点」

についての回答（複数回答可）は、家にはない良質のおもちゃがある（「子どもの興味が分かった」も含む）（15件）、子どもの友だちがいる（同年齢、少し大きい子）（9件）、清潔で広い場所がある（8件）、お母さん友だちと交流できる（6件）、気候に関係なく利用できる（4件）などが上位であり、その他では、子育て中のストレスが他の母親と交流することにより発散できる、スタッフ（保育士）に相談にのってもらえる、手遊びや読み聞かせがあるなど、全部で12項目であった。このことから、良質の保育教材を準備し、子育て中の親子が気軽に集う場を提供するという、初期の目的を達成できたといえる。

(2) 「改善点や希望する事項」について

リトミック講座や手遊び、季節のイベントなどの定期的開催を求めるもの（8件）、ひろばの開設時間や回数の増加を求めるもの（6件）、現行の設備の改善点について述べたもの（4件）があり、さらに、託児付きの講座の開催や学生との交流を増やしてほしいという意見もあった。施設面について改善できることは、平成23年度に対応する予定である。運営面のイベントの開催については、スタッフが対応できることはすぐに実施し、音楽学科等の協力を必要とする事柄については平

成23年度に検討する。ひろばの開設時間を延長することは現時点では困難である。ただ、ひろばの2階に位置する図書館が、ひろばより早く始まり、長時間開いていることを利用して、図書の閲覧・貸し出しを実施することにより対応したい。託児付きのイベントの開催は簡単ではないが、平成23年度には広島文化学園大学音楽学科の「アウトリーチ」の授業で季節ごとの音楽会が計画されている。子育て中の親子に楽しい体験を提供する予定である。

(3) 子育て支援のありかたの研究について

子育て支援の目的は家族支援であり、子育て中の家族が主体的に子育てする力量をつけるための支援である。そのために、子育ての当事者が自ら考え行動するための社会資源を提供することが必要となる。本学のひろばでは、地域の保育サークル作りの支援や、遊びや素材の提案、世代を超えた、地域の支援者と被支援者のネットワーク作り（人材バンクなども含む）、海外の事例からヒントを得たさまざまな子育て支援の方法の提示、他の地域子育て支援活動との情報の交換など、子育て支援に関連する多彩な活動を提案し、人や活動を繋げていくことが今後の課題である。

（ぶんぶんひろば担当：保育学科・田頭伸子）

コラム

まっしろな壁がアートな空間に！



ぶんぶんひろばが軌道にのりはじめたある日、運営委員の一人が、ひろばの一番奥の壁が、真っ白で、寒々しく、なんともさみしい。何か明るく、楽しいスペースにできないものかと考えはじめました。

まず、絵本を、ゆったりと、表紙を見せながら飾ろうと考えました。赤ちゃんの手が届く低い位置に赤ちゃん用の絵本を季節に合わせて、いろいろ並べ、楽しんでもらうことにしました。

知り合いの木作家Kさんに棚づくりを依頼し、さらに、この「白い壁」がなんとかならないだろうかと相談したところ、なんと、その白い壁はアーティストの表現魂に火をつけたようです。紙や木を使っておもちゃやモニュメントを作るのが大得意のKさんが、おもちゃや、額、動物のモニュメント、天井からつるす飛行機などのさまざまな作品を飾って、白い壁が、あっという間にアートな温かい空間に早変わり。

Kさんは「ちびっこの反応はどうか」と毎回どきどきしながら作品を作っているそうです。

